

第2回研究会報告 及川淳子、朝浩之、家入亮子……(1) / (第3回研究会要旨) プロレタリア文化大革命は労働観、人間観の何を変え、何を変え得なかったのか 前田年昭……(3) / 下放の研究に関する覚書 土屋昌明……(8) / 中国の下層民衆に息づく墨俠精神と毛沢東思想 前田年昭……(10)

第2回研究会報告

「反腐敗」と「権力闘争」を事実分析するなかで見る文革

5月28日(木)第2回研究会がもたれた。この会は、矢吹晋を報告者に迎え、専修大学社会科学研究所(土屋グループ)との共催で多数の参加者を得た。

矢吹は報告冒頭、矢板明夫『習近平 共産中国最弱の帝王』(文藝春秋、2012)を加藤隆則『習近平の政治思想 「紅」と「黄」の正統』(勉誠出版、2015)と対比して批判を展開、前著の習近平を最弱と捉えることは間違えであり、それは、日本のメディアの主流にもなっている。太子党と共青团との権力争い説や習近平政権脆弱説を批判した。また、文革は評価が難しい。現在「名誉回復」という名のもとに行なわれることをどのように考えるか、反右派闘争も同様の難しさを指摘しつつふれた。

日本の報道は「反中嫌韓」にのまれてしまい、事実分析ができていないという指摘には、参加者の多くが頷いた。

矢吹は、2014年夏の除才厚らに対する処分は習近平に対する判断を変えるに値する事件だという。活発な質疑が行われた。習近平をプチ毛沢東というのはその手段を指してか思想を指してか。「反腐敗」というが一般の人はどう思っているのか。弾圧など「改革」の先送りではないのか。法輪功の分析が当たっているのはなぜなのか。等々。

(敬称略、文責・田中)

中国を読み解くための粘り強さ

及川淳子

「観察対象である現実の大きな変化は、認識する者の側にたえず反省をせまる」。この言葉は、矢吹

先生が評伝『鄧小平』に記したものだ。私がゼミ生時代から「矢吹語録」を書き留めている中で、折に触れて読み返す言葉でもある。

習近平をどう読み解くか。中国政治を観察する誰もが頭を抱える難題を、矢吹先生は一刀両断「プチ毛沢東」と評した。数年来、先生の習近平評価がどのように変遷したのか、転換点となった重慶事件と一連の虎退治から「影射史学」で語られた曾慶紅批判に至るまで、豊富な資料と鋭い分析で複雑な事象があざやかに読み解かれた。さらに、「現実の動きと同時進行で分析すべきだ」という批判に基づいて、習近平は経済や外交で「プチ鄧小平」の役割も演じていると指摘した。

言論弾圧については、現体制の維持を最優先課題とする習近平にとって「政治的混乱の芽を摘むための予防で過渡的ではないか」という論評だった。この問題に対して私は極めて悲観的だが、現実の大きな変化を前に、観察する側の姿勢が問われるのだと痛感した。

「矢吹中国学」の神髄は観察対象に逼る迫力と粘り強さだと再認識する研究会であったと思う。参加の機会を得たことに感謝したい。

反腐敗闘争の原動力は習近平のプチ毛沢東

朝浩之

習近平による反腐敗闘争をどう見るかは現在の中国を見るためのリトマス試験紙、反腐敗闘争の原動力は習近平がプチ毛沢東化したことにある。これは第2回研究会の矢吹晋氏の発表を聴いての私の解釈

である。この当否はともかく、丹念な資料収集とその分析に基づき論を組み上げていくという、常に一貫した氏の論理構成には圧倒される。資料収集は肉体労働そのものであるから、失礼ながら既に老境にある氏に取って代わる研究者、分析という頭脳労働をもこなせる、研究領域を同じくする若い研究者が現れること願ってやまないが、当面は氏に声援を送り続けるしかないようだ。

氏の中国論評が、日本のチャイナウォッチャーの中国論評批判と不可分な形で提示されることについては、かつて氏のインタビュー本を刊行するにあたって考えた末にタイトルを『中国から日本が見える』としたとき以来、私が氏の論著を読むときの最大のモチベーションとなっている。

反腐敗闘争は、大方の日本人にとっては中国共産党内の権力闘争には辟易とするといったものになるだろうが、氏の発表からはそうではないということが見えてくるのである。さらに、毛沢東（鄧小平）－習近平（影に習仲勲）をキーワードにすることによって、文革をどう見るかについての新たな視点が現れてきそうに思うのだ。

現在、ほとんどのチャイナウォッチャー——中国を対象とする研究者・ジャーナリストは、私には評論しかしていないように見える。評論自体を否定するつもりはないが、チャイナウォッチャーにとっては現場が第一のはずだ。私が文革に向かうとき、では私にとっての文革の現場とは何なのか、それを念頭に置いて本プロジェクトに関わっていきたいと思う。

文化大革命再考の時期が到来

家近亮子

本研究会の案内をいただいたのは、第2回研究会（2015年5月28日）が開催された1週間前であったが、即答で参加の返事をした。当日は千葉の本務校で5時50分まで授業があったが、終わると同時に走って、東京に向かった。矢吹晋先生が講師で、タイトルが「習近平と文革—現代に落とす文化大革命の影」とあっては、参加せざるを得ない。

私の専門は中国近代政治史であるが、文化大革命

は常に頭の片隅から離れない重大テーマである。私が初めて中国に行ったのは、1978年の夏であった。改革・開放が始まったその年、中国には文革の影が色濃く残っていた。北京郊外の人民公社では農民たちや共産党幹部が毛沢東崇拜を依然としてはばからなかったし、小学校では児童たちが自分の背丈よりも長い銃で「打・倒・四・人・組」と書いたパネルを打ち抜く軍事訓練をしていた。北京市内には下放青年らしい人々がうつろな目で、所在なく街のいたるところに座り込んでいた。それは、かつて紅衛兵として、首都を闊歩し、あばれまわっていた少年たちの十年後の姿であった。彼らはその間、どのような体験をしたのか。

今回、研究会に参加し、矢吹先生のお話を伺い、その時の思い出が蘇った。習近平は父親が早くから批判されたため、紅衛兵とはなれず、自ら志願して下放青年となった。「文革の加害者とはならず、被害者としての体験しかもたない習近平の文革観」、矢吹先生の視点はいつでも新鮮である。習近平は、あの時生き生きとした目で北京に戻った一人であったのであろう。彼は下放先の陝西省延川県の人民公社の「窑洞」で、『毛沢東選集』を熟読しながら、どのような「中国の夢」の実現を考えていたのだろうか。しばらく、中国政治から目が離せなくなった。

———今後の研究会予定———

第4回 9月24日(木)、専修大学神田校舎
「香港における文革」

報告・佐藤賢(明海大学専任講師)

第5回 11月26日(木)、専修大学神田校舎
「私にとっての文革体験」

報告・朝浩之(編集者)

問合せ先：土屋昌明 tuwu@s01.itscom.net

原稿募集

研究ノート、書評、映画評など積極的な投稿をよびかけます。現在、例会は奇数月最終木曜で、会報は同日発行です。事前配布を保証するため、原稿〆切は、例会の10日前迄に、とします。(編集部)

第3回研究会(2015年7月30日)発表要旨

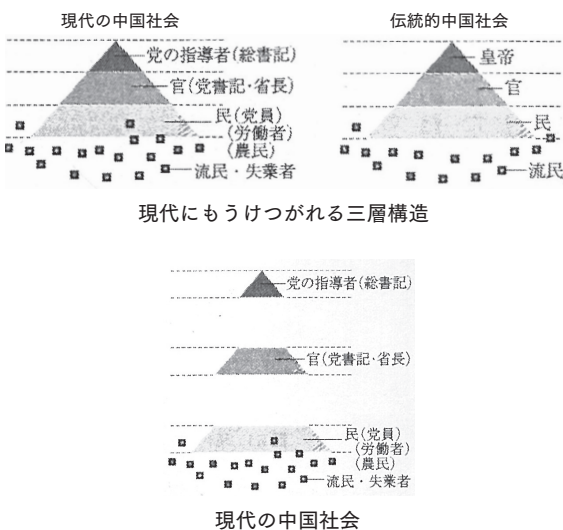
プロレタリア文化大革命は労働観、人間観の何を変え、 何を換え得なかったのか

前田年昭

はじめに

2015年6月9日、貴州省の畢節市で、両親の出稼ぎ中に5～13歳の4兄妹が農薬自殺した。妹3人の面倒を見ていた長男は「ありがとう。死ぬことは長い間の夢でした」との遺書を残した¹。13歳の子に死を長い間の夢と言わしめる社会とは常闇の地獄以外の何ものかでありえようか。現代中国はアメリカ同様、地球上で最も醜い、「人が人を食う」社会である。

竹内実は中国社会の伝統的な三層構造(皇帝-官-民)は現代にも受け継がれ、さらに亀裂が生じて、党の指導者(総書記)-官(党書記・省長)-民(党員)(労働者)(農民)-流民・失業者となっていると次のように図示して指摘した²。



1976年の毛主席の死後、党はブルジョア特権官僚集団に変質し、社会は国家資本主義に変質した。悲惨な学童自殺事件は、呻吟する6100万「留守学童」の、習近平政権に対するやむにやまれぬ社会戦争の一形態である。

頻発する暴動に恐怖した官僚支配階級は、深刻な危機を「和諧社会」というキャッチコピーでは

支えきれぬとみるや「反腐败」の大芝居をうって、貧民の怒りと不満を回収しにかかっている。この動向を「習近平の虎退治」として持て囃し、「太子党内の既得権益擁護層に対して、果敢な権力闘争を挑んで、これに勝利しつつある」などとする見方は、民衆の怨嗟に目をふさぎ、社会戦争の本質を隠蔽するものである。亀裂を深めつつある三層構造の頂点だけを見ても中国社会は把握できない。

習近平の薄熙来らとの争いが猿芝居であることは、彼らの経歴が証明している。習近平も薄熙来も皆、プロレタリア文化大革命当時は、出身階級血統論に立つ保皇派紅衛兵もしくはその周辺にあって造反派に敵対していた³。彼らは、科挙なき後の党官僚エリートコースを保証された特権階級として、プロレタリア文化大革命の造反の嵐に恐怖し、そして、革命の炎を篡奪したのである。習近平や薄熙来を「プチ毛沢東」「毛沢東の真似」とする見方は、結局のところ、支配階級の煙幕に奉仕するものである。彼らが大衆を信頼せず、大衆運動を恐れている事実が何よりも証明しているのではないか。反論があるならば、彼らがなぜ大衆の自然発生的抵抗を恐れ、管理統制しようとするのか、説明してみるがいい。

文化大革命では労働観の転換が問われた

「もっともきれいなのはやはり労働者、農民であり、たとえ、かれらの手がまっ黒で、足に牛の糞がついていても、やはりブルジョア階級の知識分子よりきれいだ」——これは、プロレタリア文化大革命(以下、文革と略す)の頃、にさかんに引用された毛主席の言葉である。本稿では、文革が人びとの労働観、人間観の何を変え、何を換え得なかったのか、という問題意識から、文革における労働観の意識変革を検討したい。

1966年、中学に進学した私は、毛沢東思想と共

産主義運動に生きようと心するきっかけになる本と出会う。ひとつは尼崎市立図書館の自動車文庫「きぼう2号」で借りて読んだ袁静『ちびくろの出発』（君島久子訳、新日本出版社、1966）であり、もうひとつは、少し後のことになるがDIC（共産主義青年団）の土方健さんに教えられた愛新覚羅溥儀『わが半生 満州国皇帝の自伝』（新島淳良・丸山昇 共訳、大安、1965、のち、小野忍訳、ちくま文庫、1992）である。

前者はかっぱらいをするしか生きる術のなかったストリートチルドレンの、後者は身の回りのことを何ひとつできなかつた満州国最後の皇帝の、それぞれが「人間が人間にとって最高の存在である」ことを獲得していく物語である。自己修練などによるのではなく社会運動による思想変革のみちすじを示したのもとして、ソ連型ではない中国型社会主義の魅力を私はここから感じ取った。

「多くの人たちが、労働をあやまって神が人類に与えた懲罰だとみなしているのに、共産党員だけが、労働を正しく人類自身の権利だとみなしている」『わが半生』大安、1965、下p.215

私が高校における全共闘運動を経て17歳で下放するにいたった過程については、すでに「学問論 私はなぜ四〇年前に母校を中途退学したのか」（2011）⁴や「死者は生者を捉え、妄想は遅れてきた全共闘を走らせた」（2005）⁵などで書いたので、ここでは繰り返さない。しかし文革が篡奪された革命として終わった後の映画、謝晋『芙蓉鎮』（1978）は何ともやるせなかつた。主人公は、「五悪分子（地主、富農、反革命分子、右派、不良分子）」の烙印を押されて朝早くから街の掃除をやれといわれ、人びとの白い目にさらされた。

「たとえ、かれらの手がまっ黒で、足に牛の糞がついていても、やはりブルジョア階級の知識分子よりきれい」ではなかつたのか。そもそも、労働が尊ばれ、労働者が主人公である社会主義で、なぜ労働が懲罰として与えられねばならないのか。以来、私の問題意識は、文革とは何だったのか、文革は人びとの意識、とりわけ労働観、人間観を変え得たのか、に向かう。研究につれ、文革は正しかったという信

念はますます強まりつつ、である。

2015年5月14-16日、『毎日新聞』に注目すべき記事が載った。秋山信一記者の「素顔のサウジ」全3回である。収入が増えると「単純労働を蔑視し、職をえり好みする」ようになるというのである⁶。

急速に都市化が進むサウジアラビアの首都リヤドでは、高層ビルや道路の建設ラッシュが続いている。作業員の大半は南アジアや中東、アフリカからの出稼ぎ労働者だ。「現場で働くのは外国人と相場が決まっている。10メートル移動するのにも車を使うサウジ人にきつい仕事はできないですよ」。イエメン人のホテル従業員、アフマド・サフワンさん（29）が冗談交じりに言った。

サウジの総人口約3000万人のうち約1000万人を外国人が占める。建設労働者や飲食店従業員、運転手などの大半は外国人だ。月2000リヤル（約6万4000円）程度の薄給で働く人も多いという。

一方、サウジ人は、国家収入の約9割を占めるオイルマネーに基づく社会保障に守られてきた。公立施設では医療や教育は無償。大学生には文系なら月840リヤル（約2万7000円）、理系なら920リヤル（約3万円）の手当が支給される。ガソリンは1リットル0.5リヤル（約16円）で飲料水より安い。所得税や住民税もない。

だが、外国人との「分業」が固定化し、サウジ人の教育水準が高まったことは弊害も生んだ。サウジ人が単純労働を蔑視し、職をえり好みするようになったからだ。〔後略〕

職業観、人間観を決めるものはいったい何か。分業の固定化、生活水準や教育水準の向上は、職業の貴賤を固定、拡大するものなのか。絶対的貧困化の深まりにつれて、職業の貴賤だけでなく、お互いに生きている「同じ現実」が同じように見えなくなってきているのではないだろうか。

『AERA』2015年5月25日号はピケティ・ブームを採りあげ、池上彰と佐藤優の対談を載せた⁷。

佐藤 〔中略〕今、目に見えない貧困がものすご

く広がっていて、非常に深刻な状況になっていきます、なぜ見えないか。一つは、メディアという職業が、エリートの職業になってしまったから。昔は食い詰めて就職口がないような人がメディアの世界に入ってきたのですが、今はエリートが入ってくるようになった。だから、たとえ新宿でホームレスを見ても、“見えない”。

率直に言うと、私も外交官時代は、ホームレスが見えなかった。けれども、逮捕され、[中略]私がホームレスになる可能性だって相当あった。そういう状況を経験すると、見えるものと見えないものは変わってくる。

池上 貧困が見えなくなったもう一つの理由に、中学受験が盛んになり、中高一貫校に入る人が増えたことがあると思います。自分と同じような環境の人ばかりで、ほとんど貧しい人がいない。そういう限られた環境の中で育ったエリートが世の中に出ていくから、何も見えないんですね。

優等生と劣等生、専門家と素人の社会戦争を直視し、労働観をはじめ価値の転換、転覆を図ることによって、社会と個々人の変革を目指そうとしたのが、文革ではなかったのか。

毛主席は折にふれて「農村作風」を強調した。その内容は次のようなものであった⁸。

「軍隊のなかで、封建主義を一掃し、なぐったりとなりつけたりする制度を廃止し、自覚的規律をうちたて、苦楽をともにする生活をしていた」

「戦闘が終るごとに、指揮員と兵士たちは戦闘におけるかれらの行動の成功と失敗について、すわったまま率直な討論を交した。……兵隊たちは自由に上官の誤りや愚かな行動を批判することが許されていた」

「その苦しさは誰もおなじで、軍長から炊事兵にいたるまで、主食以外は一律に五分（フェン）ぶんの食事しかとっていない。こづかい銭を支給するにも二角（チャオ）なら一律に二角にし、四角なら一律に四角にしている」

「軍隊は経済的には自給して、だれにも負担

をかけなかった。また給料という形式のものはなかった。士官と兵士は、それぞれ一区画の耕地をあたえられており、もし、かれが戦争に出て不在であれば、他の人たちがその土地を耕したり、世話をしてくれた。士官のための特別のクラブや病院、食堂はなかった。しかも、士官は兵士と同じ軍服を着ていた」

私がソ連式でなく中国式の社会主義に惹かれた理由のひとつが、こうした「農村作風」に裏打ちされたコミュンへの志向にあった。ここにこそ、中国革命の原点があり、中国共産党の創立精神があった。

毛主席は、国内「難民」としてもっとも卑しまれ蔑まれた遊民を「兵」として訓練し、社会でもっとも尊敬される人間類型として組織し、また人民公社をつくって食えるようにした。それは、文字と言葉を奪われた阿Qたちが文字と言葉を取り戻す革命だった。三大規律八項注意を歌って言葉を覚え、生活スタイルを変えていった。識字運動であり、訴苦運動という翻身革命だった。

「良鉄釘にならず、良民兵にならず」とまで蔑まれつづけた兵を、解放軍兵士として尊敬される存在に転換し得た中国革命は、肉体労働や清掃労働を「もっともきれいなのはやはり労働者、農民であり、たとえ、かれらの手がまっ黒で、足に牛の糞がついていても、やはりブルジョア階級の知識分子よりきれいな存在にすることもまた可能ではなかったのか。

にもかかわらず、懲罰としての労働改造という制度は変わらず、肉体労働や清掃労働が蔑まれたままだとすれば、労働者階級が主人公の社会は、どのようにすれば実現することができるのだろうか。

労働観を転換し得る力はどこにあるのか

「もっともきれいなのはやはり労働者、農民であり、たとえ、かれらの手がまっ黒で、足に牛の糞がついていても、やはりブルジョア階級の知識分子よりきれいだ」という言葉は、文革期にこの部分のみが切り取られて語られたが、文脈を読み直す必要がある。

これは『延安の文学・芸術座談会における講話』

(1942)の一節であり、しかも、毛主席自身が「ここで、わたし自身の感情の変化についての経験を話してみよう」として語った一節なのである⁹。

わたしは学生出身であり、学校で学生気質が身につけてしまったため、物を肩でかつぐことも手でさげることもできないおおぜいの学生のまえでは、自分の荷物がかつぐような、ちょっとした力仕事をするこゝろさえ格好がわるいと感じていた。そのころ、わたしは、世の中できれいな人間は知識分子だけで、労働者、農民は、なんといってもそれよりきたない、とおもっていた。わたしは、知識分子の着物ならきれいだと考え、他人のものでも着られるのに、労働者、農民の着物はきたないと考えて、着る気になれなかった。革命をやり、労働者、農民や革命軍の戦士たちといっしょになってから、わたしはしだいにかれらを熟知するようになり、かれらもまたしだいにわたしを熟知するようになった。そのとき、まさにそのときから、わたしは、ブルジョア学校で教えられた、あのブルジョア的、小ブルジョア的な感情を根本的にあらためたのである。そのときになって、まだ改造されていない知識分子を労働者、農民とくらべてみると、知識分子はきれいでなく、もっともきれいなのはやはり労働者、農民であり、たとえ、かれらの手がまっ黒で、足に牛の糞がついていても、やはりブルジョア階級や小ブルジョア階級の知識分子よりきれいだとおもうようになった。感情に変化がおこり、ある階級から他の階級に変わったというのはこのことである。

ここでは意識変革は、「革命をやり、労働者、農民や革命軍の戦士たちといっしょになって」実現していったものだということが語られているのである。自発的に「革命をや」ることを通じて、であって、何らかの懲罰による労働改造などではないのである。

この毛主席の言葉がなぜ文革期に頻繁に引用されたのか。そして、文革で民衆の怒りはなぜあれほどまでに噴き出したのか。その背景には、60年代半ばには差別選別の教育と労働のシステムに対する民衆

の怒りが沸点に達しつつあったことを見なければならぬ。

歴史的経緯をたどると、1964年に劉少奇が提起した「2本立ての労働制度」と「2本立ての教育制度」に行き着く¹⁰。これは常用労働者と区別した臨時工、全日制のエリート校と区別した半工半読学校に眼目があった。劉少奇は、「半工半読」学生を見習工、臨時工として扱い、14、15歳の学生に過酷な肉体労働、しかも3班交替制を強いて深夜勤まで割り当てた。ほぼ高校全入に近い日本の中学校で、「落ちこぼれた」劣等生に「勉強できない奴は職訓（職業訓練校）へ行け」「勉強できない奴は工業高校、さらにその下、農業・商業高校へ行け」とうそぶく中学の教師は、きっとわが意を得たりと思うのではないか。

半工半読学生の造反は早く、初期の紅衛兵運動を担った。1967年初頭には「全国半工半読造反連絡委員会」が、臨時工・契約工の造反組織「全国紅色労働者造反総団」（全紅総）と並んで成立している。全紅総は「現行の契約工制度は労働者階級を2層に分割し、格差を設けることによってプロレタリアートの革命的隊列を分裂・崩壊させるものである。それは労働者大衆の革命的積極性を束縛し、社会的生産力の発展を阻害するばかりでなく、修正主義の種をまきちらし、資本主義復活の温床となるものである。資本主義の道を歩む党内のひとにぎりの実権派は、この修正主義の制度を用いて幾千万人の労働者の政治的権利を完全に剥奪している。この制度は劉少奇が1964年3月に河北省各地を視察しその報告を行なった後に、労働部がその報告をもとにして契約工・臨時工制度として規定化したものであり、全国で実施された」と批判、糾弾した。

臨時工・契約工の造反は、中国共産党中央・國務院をして臨時工・契約工制度の一部に不合理があることを認めさせ、一定の「同情と配慮」を引き出した。が、結局は利用されたあげく徹底的に弾圧され、解散させられた。

全紅総の闘いは、出身階級血統論を徹底批判して保皇派紅衛兵を震え上がらせ、1970年3月5日に北京工人体育場で死刑宣告、即時執行された遇羅克の

闘いとともに、中国革命叛史に記録され、記憶されるであろう。

広東省下放青年造反派の「支農紅旗」派は宣言している。「革命的で最も迫害を受けてきた底辺層と団結しなければならない。……現在われわれ以外にも「走資派」に少なからぬ迫害を受けてきた半工半読学生、紅色造反者等がいる。かれらの命運と境遇はわれわれと不可分の統一体として結ばれている。かれらと団結し、ともに闘い、ともに勝利していかなければならない」

むすび

文革は、篡奪され、敗北した。しかし、底辺の団結という文革本来の精神は脈々と生き続けている。「人間が人間にとって最高の存在である」というラジカル（根源的）な運動は決してなくなることはないであろう。

手がかりは映画、胡傑『星火』（2013）のなかに見いだすことができる。1960年、中国甘肅省で起きた、知識人による反体制地下活動に対する政権の弾圧事件を扱ったドキュメンタリーである。

映画『星火』で星火メンバーである向承鑑が兄に言う¹¹。

「僕目を見てよ、目は光っているでしょ？ 兄ちゃんが見える物は僕も見える。でも僕に見える物は兄ちゃんには見えない。それが僕たちの違いだ」（土屋昌明訳）

そう、結論的に先取りしていえば、経済的地位や学歴など以上に、闘うものにはしか見え、闘うことによって見えてくるものがあるのである。現代中国の常闇をなぜ法輪功の人びとが見えるようになってきているのかもまた、ここからしか説明できないであろう。抑圧は抵抗を呼び起こし、抵抗の闘いは〈ものを見る目、感じる心〉をうち鍛えていく。そしてまた日本の中国研究者が中国の、そして日本の現実を「見えなく」なっていることもまた、残念ながらここから説明できる。

「労働を正しく人類自身の権利だとみな」す労働観は、永続的に闘い続けることによってしかわがものとすることはできない。世の中でハバをきかせているモノの見方、考え方は、支配階級のモノの見方、考え方である。したがって、肉体労働や清掃労働を賤業視する労働観の転覆は、ブルジョア支配階級の政府と権力を転覆し、長期にわたって習慣と生活を変革するなかでしか実現し得ないのである。

日本の下層労働者、フリーターもまた、文革における臨時工や半工半読学生の闘いを継承し、労務者と呼ばれる下層労働者こそが真のプロレタリアートであり、「人間の完全な喪失であり、それゆえにただ人間の完全な再獲得によってのみ自分自身を獲得することができる」存在として自分自身をしっかりと確認し、目を世界に向けて闘い続ける。

（ままだ・としあき、神戸芸術工科大学非常勤講師）

引用文献

- 『毎日新聞』6月21日付朝刊
- 『中国という世界 人、風土、近代』岩波新書、2009年
- 文革期の太子党（本誌第2号、p.14）
- 拙稿「学問論 私はなぜ四〇年前に母校を中途退学したのか」2011年、灘高校土曜講座講義、http://www.linelabo.com/gakumonron_nada2011.htm
- 拙稿「死者は生者を捉え、妄想は遅れてきた全共闘を走らせた」（『ユリイカ』2005年12月号）<http://www.linelabo.com/nosaka0512.htm>
- 秋山信一「素顔のサウジ：／下 現場労働は外国人」（『毎日新聞』2015年5月16日付朝刊）
- 池上彰×佐藤優対談「エリートには貧困が見えない」（『AERA』Vol.28 No.22、2015年5月25日）
- 『毛沢東選集』1、2巻およびジェローム・チェン『毛沢東』から河地重造が抜粋したもの。「毛沢東の農民革命論」1971、『経済学年報』31集として、新島淳良が『歴史のなかの毛沢東』（野草社、1982）で引いているものからの孫引き。
- 『毛沢東著作選』外文出版社、307-308頁。
- 以下は、山本恒人「1960年代における労働・教育・下位の三位一体的政策展開とその破産 半工半読制度に焦点をあてて」（『現代中国の挫折 文化大革命の省察』アジア経済研究所、1985）に多くをよっている。山本は文革を「世界史的悲劇」とし、筆者とは真逆の立場であるが、ここではよく事実が調べられている。
- 哥哥，你看你弟弟眼睛瞎了没有？ 没有吧，眼睛很亮的，我说哥哥看到的我都看到了，但是有一点，我看到的哥哥没看到。这就是我们的差距。

研究メモ

下放の研究に関する覚書

土屋昌明

第2回研究会報告から

本会の第2回研究会で、矢吹晋氏が「習近平と文化大革命」に関する発表をおこなった。この発表では、習近平の下放体験がどのように扱われているか、という視点から話がおこされた。この話を聞いて私は、文革発動50周年を前にして、中国人にとっての文革体験に、従来と異なる意味づけがなされていることに気がつかされた。習近平によって下放体験に対する神話化が進められているのである。

矢吹氏が提示した習近平の下放体験は、2012年11月に第18回党大会が開かれ、トップ指導者に選出された際に発表された履歴と、その後、中国当局の書籍で解説された履歴に基づいている。したがって、巷間のうわさ話ではない。習近平本人の認可のもとに、共産党の公式見解として発表されたものである。これは、下放体験がプロパガンダとして使われていることを意味する。以下、そこで使われている用語を指摘しながら、下放体験に対する神話化の問題を考えてみたい。

習近平の下放直前・直後について

習近平は、1966年に文化大革命が始まった時は13歳で、北京「八一初中」の1年生であった。1968年、中学3年の時に、北京25中学という普通校に転校、15歳くらいで陝西省延川県に下放した。1969～1975年（16～22歳）を「下放青年、知識青年」として陝西省延川県文安駅公社梁家河大隊で生活した。1975年に清華大学に合格して、北京に戻った。

まずここで注意すべきは、下放先が「陝西省延川県」であること。ここは、延安から東に隣接した場所である。延安は毛沢東ら革命第一世代が根拠地とした革命聖地である。そこに隣接した場所に下放した、という点が、習近平の下放体験に毛沢東への親近性を感じさせるのである。それだけでなく、延安

は文革の大串連で北京の学生たちはもちろん、全国の学生が徒歩で向かった聖地であった。「徒歩」は、毛沢東らが徒歩で延安に辿り着き、解放区を作ったことに由来する。この行為を追体験しようとした学生たちは¹、1966年秋から延安に向かい始め、その年の冬になると、延安には数十万に及ぶ学生たちがやってきて、学校の教室などにも収容しきれず、野宿の末に凍死者が出る有様だったという。つまり延安という場所は、文革当時に青年だった世代の人々にとっては、単に革命の聖地であるばかりか、自分たちが求めた理想の象徴的なトポスでもあった。習近平は、その場所に隣接している場所で下放生活をしたわけである。

習近平の下放生活経験

そして下放生活とは、毛沢東の指示に従うだけでなく、毛沢東が提示した革命家としての生活哲学を実践することであった。つまり、農民を理解するためには、農民の中に入りていき、農民の食べるものを食べ、農民の住むところに住むのであり、その意味では、やはり毛沢東の革命の追体験なのである。以上のように、「陝北・延川」という場所には、毛沢東に親近性があるだけでなく、毛沢東の実践の追体験とも結びついたトポスなのである。

次に、習近平の下放生活についての記述によると、彼が住んだ、山の崖に掘った洞穴式住居（窑洞）には、ノミが多く、刺されて全身が水泡だらけになり、オンドルに敷いたアンペラの下に農薬を撒いた。この数年間、ほとんど休まずに野良仕事をし、石炭を運び、土嚢を積み堰を作り、肥え桶を担ぐなど、どんな仕事もし、どんな苦勞もいとわなかった。村人たちは、50キロ、100キロの麦を片方の肩で担いで5キロの山道を何時間も歩く習氏を見て、「苦勞にもつらさにもよく耐えるいい若者だ」と感じたという。

彼が住んだ洞穴式住居とは、黄土大地に掘った横

穴の内部を住居にしたもので、陝北には普通に見られる。彼のやった仕事は、たんに汚れ仕事で苦役だというだけでなく、当時の感覚では、労働改造にあたる者の仕事だと感じられる。つまり、労働によって社会主義精神を学び、自分を真の社会主義者に改造するような仕事である。習氏が100キロにもなる重い荷物を一人で(?)持って山道を歩いたというのは誇張だが、ここには習氏が下放生活を自己鍛錬の場だと考えていたようなニュアンスが感じられる。

世代として共有した経験の神話化

このような下放経験のプロパガンダは、何を狙っているのか? 1968年から75年までに、どのくらいの人数の知識青年が下放したか、詳しい統計はないようだが、1500万人はくだらないと想像される。したがって、下放経験は習近平の世代が幅広く共有している記憶である。これにより習近平は、同じ経験をした者の親近感を得られるだろう。ただし、下放青年の多くは、知的文化的な資源のない農村において、教育も受けられなかったようである。それゆえ、都市に戻った後、改革開放の波に乗れず、社会の底辺に沈滞した者が少なくない。だとすると、習氏に単純な親近感を得るのは、成功を収めた者だけであろう。それでも、それは相当数の有力者たちであることは間違いない。

成功を収めた者を政治家について見れば、現在の中国共産党中央委員の中には、50人程度が知識青年の経験を持ち、政治局常務委員7人中、習近平、李克強、張徳江、王岐山の4人が下放経験を持つ。彼らは、下放経験を示すことによって、政治家としての自己を差異化することができる。習近平は、毛沢東につながるような革命家としての鍛錬を経験し、農村の民情を察し、絶倫の知力・体力を備えているというイメージを作っている。差異化は神話化へと進んでいるようである。

文革の記憶収集とプロパガンダ

ところで、習近平が提示する以上のような下放経

験は、差異化から神話化へのベクトルを持つが、それは従来の下放のイメージとはかなり異なった提示の仕方となっている。今まで下放というものは、都市の青年が毛沢東にだまされて辺鄙で苛酷な環境の農村に遣られ、青春を台無しにさせられ、人生を狂わされ、健康を損なわされた、と考えられていた。それは收拾がつかなくなった紅衛兵運動を一挙に片付けるという点で、文革の後処理であり、文革の悲惨なトピックの一つだった。その意味では、被害者意識から下放を解釈し、都会からの目線で農村生活を見る嫌いが強かった。思想的には、辺鄙な農村の現実を認識したことで、政治的に覚醒したという側面もあった。一例として、1980年代後半に読まれた阿城の小説を、陳凱歌監督が映画化した『子供たちの王様』(原題: 孩子王)などが想起される。しかし、それは理想を裏切られるという、より深い被害者意識を前提としているのであり、やはり下放の経験を被害とみる線の延長上にあった。

そのような解釈が、90年代末くらいから少しずつ変化し始めたように思われる。下放経験者が歳をとるにつれて、悲惨な経験ではあったが、そこにはある種の理想があり、その農村なりの青春や思いが存在した、と解釈するようになったのである。それは、張藝謀監督の『初恋のきた道』(原題: 我的父親母親、1999年)のヒットに典型的にあらわれている。原題でわかるように、この映画は下放経験者の子供が、下放先での両親の青春を思うものである。

このような変化が生じたのは、経済的な向上とともに、世代的な要因がある。例えば、68年に18歳だった人は、98年には48歳になっていた。30歳で結婚したとすると、98年に子供は18歳である。まさしく『初恋のきた道』の設定は、下放青年の世代の情緒を狙ったものなのである。

そして、それから十年、文革時代をなつかしむグッズや飲食店やデザインなどが流行し、文革の記憶が消費される傾向が高まった。そのような消費の高まりとともに、文革時期や毛沢東に関わる物品を展示する博物館が簇生しはじめた²。これは、中国共産

1 張承志『紅衛兵の時代』小島晋治、田所竹彦訳、岩波書店、1992年

2 Kirk A. Denton, "Exhibiting the past: historical memory and the politics of museums in postsocialist China"; University of Hawai'i Press, 2014. この著者については、本誌第1号「討論会「毛沢東時代の民間記憶とその歴史的衝撃」報告(上)」で紹介した。

党の歴史決議にもとづく文革完全否定に抵触しないよう、敏感な話題は避けるようにしており、およそ文革を歴史的に再考するような趣旨ではない。多くの場合、ある物品に偏った収集をしており、例えばプロパガンダ画ばかりを展覧したり、ある種の日用品（例えば鏡）ばかりを集めたりしている。その点では、巴金が提唱した文革博物館の理念とは、かけ離れた趣向である。そのような博物館の流行の一つとして、下放した青年をふりかえる知識青年博物館が各地に作られている。

この七月到北京初の「知識青年博物館」が開館した。私はまだ現地を見たことはないが、ホームページなどによると、開館記念のセレモニーでは、「(私たちは)中華人民共和国とともに成長した」という大字の横断幕がかけられたようである。つまり、上にみた『初恋のきた道』の世代を指している。そして、キャッチとしては「知識青年精神は紅軍精神だ」となっている。この博物館の学術顧問は、中国社会科学院長の王偉光で、彼は共産党内の左派のブレーンとして有名である。この博物館の展示は、下放青年の生活をうかがわせる物品（服や道具や日記など）のほか、農村で英雄的な行為や社会貢献をした青年の事跡を讃える資料があるようである。まさしく習近平の下放経験と重なる内容であろう。

習近平が下放経験を使って、自分の能力と人間性を、他の下放経験のない政治家と差異化し、さらに

神話化する背景には、このような文革の記憶に関する動向がある。これについては、上述のような概観ではなく、「下放の解釈史」のようなものとして、思想的に研究されなければならないだろう。

世界史的に文革を位置づける

要するに習近平は、中国革命には参加していない世代として、集団内部で自己を差異化しつつ、大衆の情緒的な支持を得るために、下放経験を使ったプロパガンダを展開しているのである。これは、「下放」という歴史事件を歴史として思考せず、情緒化して消費し、陳腐化する方向性を持つてであろう。歴史として見た場合、文革を完全否定して、その歴史を検討しないのと同様である。しかし、以上のような習近平と下放の問題を見ることによって、日本の側にも下放の問題を検討する必要があることに気がつく。つまり、文革の動向を承けた日本でも、下放到似た行動をとった人々がおり、彼らは習近平とは違って表には出てこないが、現在の社会情勢のどこかで、みずから下放経験に基づいて思考し行動している（あるいは、しなくなった）。したがって、日本の社会史にも「下放観念の受容とその意義」というような課題が隠されており、中国の下放の思想史と連結して考察することが可能なのである。おそらくその課題は、文革の世界史的研究の重要な一環となる。（つちや・まさあき、専修大学教授）

歳出し批評

中国の下層民衆に息づく墨侠精神と毛沢東思想

——連載・滴水洞から

前田年昭

映画『墨攻』は墨侠精神に対する歪曲、改竄である

映画『墨攻』が公開された。私たちの前にいま、酒見賢一の小説（1991新潮社、1994新潮文庫）、森秀樹のコミック（1992-96、ビッグコミックス）、山本甲士のノベライズ（2007、小学館）、そして映画（2006）と四つの『墨攻』が存在する。いずれもフィクションだと公言しており、私の批判は史実に反するかどうかという批判ではない。

①酒見賢一『墨攻』

②森秀樹『墨攻』

③山本甲士『墨攻』

④映画『墨攻』

結論を先取りして言えば、前の三つはそれぞれに面白いが、映画はその面白さを“殺して”しまっているように私は思う。しかも、それは墨子と墨家集団の精神について、また、戦争について、相対立する二つの見方考え方の対立を反映しているように思

えるのだ。

(1) 映画が描き出した主題は「戦争と平和」である。主人公は人(敵兵)を殺すことについて悩み続ける。戦闘場面の描写では、侵略してきた趙の軍の行動より守る梁の側の軍民の行動がむしろ残虐であり、南門の攻防と死者への鎮魂に流れている気分は戦争反対、正確に言えば厭戦である。

しかし、前の三つの主題は侵略(戦争)に対する抵抗(戦争)である。けっして戦争反対ではない。

(2) 映画が描き出した民衆は、王や貴族の権力争いに巻き込まれ、ひといめに遭いつづけ、無力であわれな、救済対象としての民衆である。

しかし、前の三つに出てくる民衆はちがう。抵抗と防衛の大義に目覚めるや、結束して大きな力を発揮する。歴史の主人公である。

(3) 墨家の原点たる墨侠精神を体現する主人公・革離は、梁王と梁の防衛についての「契約」をかわずにあたって、指揮権のすべてを与えること、王の側の女性たちをも例外なく組織編制に組み入れることを絶対的条件として要求し、これを認めさせた。

しかし、ひとり映画のみが、王の側の女性たちは編成に組み入れられず、逸悦が率いる精驥馬隊は革離の指揮下に入らなかったことになっているのはなぜか。

(4) 革離は梁の人々にとってみればよそのものでしかない。彼が何ゆえ城主梁溪や貴族の嫉妬やねたみ(本質的には恐怖である)を招くまでに人心をつかみ、人々を団結させ得たのか。

革離が自らの刀で腕を切ってみせ、「私の血を吸った土地を私は全力で守る」「降伏すればたとえ肉体的生命が保ちえたとしても奴隷と陵辱しかない」と軍民を前に演説し、人々を決起させる場面があるが、この場面がひとり映画のみ欠落しているのはなぜか。

歪曲と改竄はまだまだあるが、ここにある対立は、四つの物語の四つの個性ではけっしてない。ひとり映画版『墨攻』のみが、偽善的でふやけた「戦争と平和」の、ハリウッド流の、欧米「人道主義」の軍門にくだった立場に立っていることを示している。ひとり映画版『墨攻』のみが、墨家思想と墨侠精神

を裏切り、ふみにじっている。私はそう思う。

現代中国に毛沢東と中国共産党は墨家思想と墨侠精神を復興し、中国革命と文化大革命をはじめた。その毛沢東と中国共産党の軍隊であった人民解放軍のふたつの軍区がこの映画版『墨攻』に協力している事実は、中国の「党」と「軍」もまた、毛沢東死後、墨侠精神を裏切り毛沢東思想を否定してしまったことを事実で証明している。(07.2.16)

墨家と毛沢東思想

映画『墨攻』が来年2月公開という。



(監督・脚本：ジェイコブ・チャン、出演：アンディ・ラウ、アン・ソング、ワン・チーウエン、ファン・ピンビン、チェ・シウオン、2006・中国日本香港韓国合

作、配給：キュービカル・エンタテインメント、松竹)

戦国時代に孔子の弟子たち(儒家)と対峙、天下の思想界を二分したのが墨家である。墨子は孔子の「仁」から出発したが、工商業者の思想、市民社会の思想として発展させられ、「天下の賤人」たる工人を教育、組織した。これは、毛沢東が、近代西欧の個人主義やアナキズム、マルクス主義から出発して「大同」を主張し、社会の最下層の遊民、外村人、工人階級を教育、組織し、強力な解放軍をつくりあげたのと酷似している。ともに「防禦」から出発する弱者のための軍事論であったことも共通である。

新島淳良氏は「イデオロギーとしての毛沢東は、前5~3世紀の墨家思想の蘇りである」と指摘したが、事実、毛沢東こそが、国内「難民」としてもっとも卑しまれ蔑まれた遊民を「兵」として訓練し、社会でもっとも尊敬される人間類型として組織し、また

人民公社をつかって食べるようにしたのである（新島淳良『歴史のなかの毛沢東』）。

墨家は減んでのち、その思想は「墨侠」と呼ばれる遊俠集団にうけつがれた（増淵龍夫『中国古代の社会と国家』）。その社会的基盤は最下層の遊民である。現代の中国遊民無産階級の心に、墨家の思想が生きつづけていたからこそ、かれらは毛沢東に共鳴し、宗教的にまで帰依したのである。毛沢東の死後、中国の党は変色し、社会は変質してしまった（東嶽廟では官職を得たいという神さまに人気集中し、北京では地下道でも法源寺の門前でも乞食が物乞いをしている）。

「打不平」＝天に代わりて不義を討つことは、墨家から毛沢東へ、さらに第二、第三の中国革命－文化大革命へと受け継がれていくことはまちがいない。

(06.12.18)

「労働」をめぐる二つの路線の闘争

労働者農民が主人公である、とはどういうことだろうか。労働者農民が主人公である社会かどうか、はどのようにして判定できるのだろうか。

労働者農民が主人公という社会が実現していたら、労働者農民が尊敬され、労働者農民が社会で幅をきかせ、労働者農民の労働が尊敬されているはずである。少なくとも、「労働改造」と称して労働をいわば懲罰にはしない。はずである。悪い奴に罰として、敬意の対象である労働を与えては、労働は尊敬されない。労働者農民は尊敬されない。

映画『夜明けの国』、半農半読学校でブタを飼育する場面がある。

「われわれの搾った牛乳や、取り入れた穀物が、中国の人民に、ひいては世界の人民に奉仕すると思うととても愉快だ、と一人の生徒は言った。」

このナレーションはとてもカッコいいと私は思う。「満州国」皇帝であった愛新覚羅・溥儀の自伝『わが半生』にこんなくだりがある。

【…多くの人たちが、労働をあやまって神が人類に与えた懲罰だとみなしているのに、共産党員だけが、労働を正しく人類自身の権利だとみなしている】大安1965下 p.215

『労農兵と結びつく道をあゆむ』外文出版社1970に収められている呉小明「永遠に貧苦牧民のよき継承者になりたい」にはこんなくだりがある。

【…学習をつうじてわたしは、貧苦牧民のなかで生活してしながら、自分を牧民の上においていることに気がつきました。つまり苦しい仕事や疲れる仕事、きかない仕事は牧民がやり、自分は楽な仕事やきれいな仕事をやるのがあたりまえだ、という考えがあったのです。これでは、毛主席が教えているように、思想感情の面から勤労人民ととけあうことができません。また勤労人民が自分を身内のように見てくれることができましようか。】

こうした労働観を〈下放〉路線の労働観と呼んでおく。私自身、この立場観点をソ連型社会主義とはちがってとても新鮮なものとして受けとめた。それゆえ学校をやめ、3Kの肉体労働の現場に〈下放〉したわけである。

シモーン・ヴェイユの戦争と革命についての考察には惹かれながらもその労働観には強い違和感を感じる。『工場日記』を読むと、ひたすら痛い。

【第六週 10日……気分がすぐれなかったが、仕事をつづけた、——はやいスピードで。がんばった。しかも、しばらくたつと、一種の機械的な幸福感をおぼえた。これはむしろ墮落のしるしであろう……】

単調な反復労働のもたらす「機械的な幸福感」が、なぜ、どうして「墮落」なのか。

彼女は、歴史をつくるのは単調な反復労働の営々とした蓄積であること、社会をつくるのが単調な反復労働を担う人びとであることを理解していない。

他方で、精神労働は肉体労働より下位であり、労働は罰だと信じている観念に縛られている。あそらくそれゆえに、感性的認識である「機械的な幸福感」から理性的認識へと深めることを拒み、「墮落」と断じてしまっているのだろう。

典型的なインテリの自己憐憫である。

単調な反復労働の心地よい疲れのあとに呑む酒はサイコーである。そして人びとは食って寝る。

(06.10.10)

(まえだ・としあき、神戸芸術工科大学非常勤講師)